《研究論文5》

モンゴルにおける日本語教育

ナイダン・バヤルマー*

モンゴルでは、1975年に日本語コースが副専攻としてモンゴル大学において開設されて以来、1990年から日本語を専攻とする大学が増え、現在は英語に次いで第2位を占める大きな分野となった。

1. 日本語教育の概観

国際交流基金の調査を参考にしてみれば、モンゴルにおいて日本語教育を実施している機関数、教師数、学習者数は表1に示す通りで、1998年度調査に比べ、2003年度には日本語教育機関数、教師数、学習者数はそれぞれ3~4倍増加している。

2003年度の場合、日本語教育を実施している機関を小・中等教育、高等教育、教育機関以外

表 1 日本語教育機関、教師数、学習者数

	機関数	教師数	学習者数
1998年度	24	76	2660
2003年度	67	199	9080

表 2 教育段階別日本語教育機関数、教師数、 学習者数(2003年度調査)

	機関数	教師数(人)	学習者数(人)
小・中等教育	15	33	3601
高等教育	36	127	4243
教育機関以外	16	39	1236
合計	67	199	9080

の機関と分類すれば次の表2の通りで、教育段階別日本語教育機関数、教師数、学習者数の比率を図1で示す通りである。このように学習者が急増した原因として考えられることは日本企業の増加や日本語教育を行う機関が増えたこと、

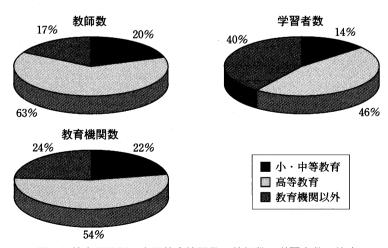


図1 教育段階別日本語教育機関数、教師数、学習者数の比率

^{*}モンゴル教育大学外国語学部東洋言語学科日本語講師

また、日本語とモンゴル語の構造が似ていることや、モンゴル人力士の活躍などの理由で、日本に対し好印象をもっていること、日本のドラマやアニメなどの人気も高く、現代日本のサブカルチャーに興味を持っている若者も多くなったことなどがある。

2. 教育段階別の状況

1. 初等・中等教育における日本語教育 1. 1 概観

小・中等教育機関には、小学校、中学校、高校が含まれる。モンゴルの教育制度は小学校が4年間、高校が2年間、全10年間で、小・中等教育の8年間は義務教育となっていたが、2004年9月より義務教育期間が1年長くなった。これは、就学期間が10年と他国に比べると2年短かったためであり、教育改革として段階的に10年から11年、11年から12年にする対策である。

小・中等教育機関の多くは国立学校であるが、 1990年に入ってから私立学校が増えてきた。日 本語教育を行っている学校の大部分は私立学校 で、国立学校はその3分の1である。

第2外国語は基本的に、英語が必修外国語であるが、教師や教材、学習希望者など条件がそろえばどの言語を教えてもよいことになっている。ウランバートル市内の数校はこれに基づき、日本語教育を行っている。日本語を教えている中学校は、毎年5校ぐらいずつ増えてきている。最近は日本式の私立高校「新モンゴル」も開校した。近年、ダルハン市、エルデネット市、ウブルハンガイ県、バヤンホンゴル県、ホブド県など地方の中学校でも、日本語を教えている。

2. 1. 2 学習目的

学習者の多くは外国語学習に興味があるため、 日本という国や日本の文化について知識を得る ためで、友達や親の勧めで学んでいるという学 習者もいる。

2. 1. 3 カリキュラム・授業内容

カリキュラムは各教育機関で作成したもので、学習時間数は小・中学校の場合週2~4時間(1時間は40分)、高校の場合週4~6時間である。小学校では殆ど2年目から日本語教育が始まるが、1年目から教える学校もある。授業内容は会話と文法が中心で、教科書は小・中学校は「できるよ1~4」、「みんなの日本語1,2」、「ひろこさんの楽しい日本語」、「日本語初歩」、「わくわく日本語1,2」、「新日本語の基礎」、高校では「日本語中級1」などが主なものである。

2.1.4 教師

教師の資格は小・中学校の教師の場合、学士号を取得していることが要件である。表 2 と図 1 からみれば、小・中等教育機関の教師数の比率が17%、学習者の比率が40%であり、教師一人が担当する学習者数は37.5人という計算になる。これは、モンゴルの場合、外国語教育において、1 クラスあたり18人という基準に比べると多い数である。

教師の年齢は22歳から30歳代と若い。非常勤教師は少なく大部分は専任教師である。日本人教師も少なく、第54学校には在モンゴル日本人教師、第23学校と「モンゲン」学校には青年海外協力隊の教師が教えている。

教師の研修は国際交流基金の海外教師短期研修と長期研修があるほか、ウランバートルに「モンゴル・日本センター」が開設されてからは、日本語教育実習コースで日本語教師研修を受けることできるようになった。

2.1.5 問題点

1. 文部科学省から認められた総合カリキュラ

ムが策定されていず、各教育機関が個別に手に入れた教科書を用いて日本語教育を行っている。同じ教科書を使い、同一カリキュラムでの教育が望ましいが、現在はそれがなされていない。

- 2. どの学校も学習者人数が多いこと。小・中学校の場合、教師数が少ないためクラスをわけることができないことなど。
- 3. 新設の日本語科では、教科書や教材が不足 している。子ども向けのDVD、アニメなど の親しみやすい教材が必要だが、現在はほと んどない。
- 4. 教師の多くは大学を卒業したばかりの人が 多いため、教授法などをはじめ経験が不足し ている。

2. 2. 高等教育

2. 2. 1 概観

モンゴル国において、モンゴル大学、モンゴル技術大学、モンゴル教育大学、モンゴル医学大学、モンゴル農業工業大学、地方にはホブド教育大学という6の国立大学、地方を含め200くらいの私立大学がある。

高等教育には総合大学(4年制単科大学)、カレッジ(3年制単科大学)が含まれる。日本語は大体専門として教えるが、第2外国語とする大学も少なくない。1990年代に入ってから年々教育機関数や学習者が増加してきた。大学は日本語能力試験2級から1級レベルの知識を持つ学生を育成することが目標である。

2. 2. 2 学習目的

学生の多くが留学の手段として日本語を学んでいるのに対し、大学側は、日本語教師、日本語研究者、日本語通訳、外交官の養成を目的にしている。日本語教育を専攻させる大学においてさえ、日本語教育を専門とする教師はほとんどいないと言っても過言ではない。したがって、

日本語教授法も水準には達していない。

学習者は大学卒業後、公的機関、教育機関及びモンゴルの日系企業等に就職する他、大学院に進学する者は1割くらい。日本語学習者や教育機関が増えているので教師になる学生の方が多い。

2. 2. 3 カリキュラム・授業内容

大学の日本語カリキュラムは各機関が作成したものである。

授業時間は1学期16週×16~24時間(8~12 コマ)1コマ90分。

授業内容は日本語会話、文法、音声学、漢字、 語彙、作文、翻訳、日本事情、日本文学、日本 歴史、日本語学概論、日本語・モンゴル語比較 文法、日本語教育である(以上は殆どの大学で は同じ)。

2. 2. 4 教師

大学教員の場合、修士号を取得していることが要件である。現在、教師一人あたり学生28.3 人である。これは学習者数が多い中国や韓国に比べれば少ない方であるが、モンゴルの場合、外国語教育における平均人数1クラス18人という基準より多い。このように1クラスあたり学習者数が多い場合教師の担当時間が増えてしまう。

日本人教員の不足が深刻で、現地に住んでいる日本人で日本語教育に興味のある人なら、特に教師資格を取得していなくても日本語教師になることができる。

教師の研修は国際交流基金の他、「日本・モンゴルセンター」の日本語教育実習コースで受けることができる。最近日本語教育相談窓口において国際交流基金派遣教育アドバイザーによる相談もできるようになった。

1993年「モンゴル日本語教師会」が設立され、 現在日本語教育機関の8割、教師の9割が会員 となっている。教師会はモンゴルにおける日本 語教育および日本語・日本語教授法の研究を支 援している。2000年より、日本語能力検定試験、 2002年私費留学試験実施協力機関として関わっ ている。

2. 2. 5 問題点

- 1. 教科書、教材、設備の不足。
- 2. 日本語教育や研究者養成向けの専門的な知識を持つ日本人教師やモンゴル人教師が少ない。モンゴル大学、モンゴル教育大学、人文大学、モンゴル技術大学では修士課程が開設されたが、日本語を専攻としている大学院生は、モンゴル教育大学を例にすれば日本語科目がないため日本語は殆どできないで卒業することは事実である。だから大学院で教えられる能力の高い教員を育成し、大学院でも日本語や日本学、日本語教授法の研究ができるようにすること。

2. 3. 学校教育以外

2. 3. 1 概観

1990年代、日本語がブームになってから民間 の学校や日本語コースなどが多く作られ、開講 時間が自由、学習者の希望に添って授業が行わ れるため、夜間などの時間を利用して学ぶ社会 人が増加している。現在、ウランバートル市および地方において16の機関が教育を行っているが、その割合は全日本語教育機関の24%を占めている。最近日本留学を目的で開講されたコースも増えた。

また、子ども宮殿(小・中・高校生が週2-3回放課後、学校科目や語学、技術学、音楽など興味のあるコースを選び学習する機関)において生徒向けの日本語コースを行っている。

2. 3. 2 学習目的

学習者の多くは留学や研修が目的である。ま

た、日本企業で勤務する人も多い。学習目的が 明確なため、学習意欲も高く、短期間で中級か ら上級レベルまで学習することができる人もい る。

子ども宮殿に通う生徒の場合、第2外国語と して日本語を学べない学校の生徒が趣味として 初級から中級レベルまで学習する。

2. 3. 3 カリキュラム・授業内容

カリキュラムは学習者のニーズに合わせて作成され、内容も授業時間も多種多様である。日常会話や専門日本語を中心とする学校が多い。

子ども宮殿は週2回1コマ程度で初級から中級レベルまでの会話や文法を中心とした日本語を教えている。

2. 3. 4 教師

教師は学士号を取得している人が多い。留学 が目的で教育を行っている機関は日本人教師が 経営する学校が多い。

2.3.5 問題点

学校教育以外の機関は、設備や教材が豊富ではあるが、教師が不足しているのは、学校教育機関と同様である。また、教育を行う適切な教室を持っていない機関もある。

2. 4. モンゴル・日本センター

モンゴル日本センターは、国際協力事業団 (JICA) の「モンゴル・日本人材開発センター プロジェクト」として2002年1月に開始された。モンゴル日本センターは、以下のような業務を行っている。

- 1) 人材開発を主眼にしたコース: 1. ビジネス日本語コース 2. IT日本語 3. 日本語で学ぶパソコン
- 2) 相互理解を主眼にしたコース:1. 映画で 学ぶ日本語 2. 日本語―日体験授業 3.

月例日本語力テスト

3) 人材開発と相互理解の双方を視野に入れた 業務:1.日本語教育実習コース 2.公開 セミナー

モンゴルで日本語上級の充実したコースがないため、「モンゴル・日本センター」は日本語教育機関で学習できない専門的日本語、上級レベルの日本語を補習できる。また、日本企業の社員教育の教材などを参考にして、受講者の就職活動に役立てるコースも運営している。特に、日本語を学習する若者にとって日本語・日本文化に接触する唯一の機関である。

3. 結論

このようにモンゴルは、15年前から民主化に入ってから日本語学習に関心が持たれ、現在では外国語学習においては英語に次いで第2位を占めるようになった。このような学習者の増加が今後も続くかどうかはわからない。しかし、日本語教育に携わっている教師は、教授法の力量が不充分ながらも創意工夫を重ね、コミュニケーションを重視した、応用力を高めるための授業を行っている。学習者は教科書を一冊ずつ投業を行っている。学習者は教科書を一冊ずつたいうことさえ困難な状況にありながらい、非常に好奇心旺盛で学習意欲が高い。教材や設備は常に不足し、専門家も少ないという現状であるにもかかわらず、短期間で比較的高いレベ

ルにまで習熟している。今後、学習環境に恵ま れればさらに向上していくことは確信できる。

近年、国際交流基金、民間の日本語教育機関 (明星日本語学校)などが、日本語スピーチコンテスト、日本歌コンテストなどを開催し、優勝者を日本への旅行に招待したり、留学させたりするようになったこと、蒙日間での交換留学が行われるようになったことなどは、学習者の意欲を高めるための大きな動機付けとなっている。

今後は、ITの利用も考えていくべきであると考える。日本語の授業以外には日本語や日本人と触れる機会の少ない学習者にとって、インターネットを利用した授業は有用であろう。このことによって日本との交流を広げ、マルチメディア教育も実施していけば、より学習意欲も高まり、日本語教育によい影響を与えることだろう。また、現在では行われていない大学院でのより高度な日本語教育や研究は急務である。さらに、今後はより多くの教師が日本に留学・研修できるようになることが望ましい。

参考文献

- T. Munhtsetseg「モンゴルにおける日本語教育— 現状と問題点」『世界の日本語教育』1995.3
- 2. 国際交流基金国別情報 http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2003/mongolia.html
- 3. モンゴル・日本センター HP http://www.jpf.go.jp/j/learn_j/voice-j/higashi_asia/ mongolia/